

仮面ライダーネルヴ —鎗木憐は仮面ライダーである—

紅乃暁

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神世紀300年。中学3年生である鏑木憐はクラスメイトの犬吠崎風から、毎日のように彼女が部長を務める勇者部への勧誘を受けていた。

ある日、夕飯を作ってくれたお礼に勇者部の活動を手伝うことになる。

だがそこで彼は、バーテックスと呼ばれる謎の怪物と対峙し、彼らと戦うために仮面ライダーネルヴに変身する。

目次

第1話 「覚醒の戦士」	1
第2話 「スノードロップ」	14
第3話 「姉妹と猫と」	26
第4話 「声のカタチ」	36

第1話 「覚醒の戦士」

迷う必要なんて、どこにもなかった。でも、それを手に取るという事を、身体中のほぼすべての機関が拒否していた。

だけど、一つだけ拒否してないところはあった。

それを頼って、憐は地面に落ちたスマートフォンを手に取り、構えた。

「!?」

「ごめん、犬吠埼。でも俺は、きつとここで何もしなかったら、一生後悔すると思う」

アプリを起動すると、画面の真ん中に玉のようなアイコンが浮かんできた。同時に、腰が締め付けられる感覚が憐を襲う。

視線を落とすと、下腹部には大きなバックルがあり、腰を覆うようにベルトが巻かれていた。また、バックルにはスマートフォンを横に刺し込めそうな場所があった。

俺は無意識で、そこに手に持ったスマートフォンを差し込み、顔を上げて、風の前にいるバーテックスを見つめ、叫んだ。

「……変身ッ!!!」

『ヘンシンアプリ起動。モード【ネルヴ】ーーフラワーブロッサム』

気づけば、俺の全身は薄いピンク色の装甲に覆われ、花びらを散らしながら、そこに立っていた。

「憐……」

「これが、俺の……」

『仮面ライダーネルヴ』が、今ここに返り咲いた。

神世紀300年。

この世界には、勇者がいた。

そして、仮面ライダーがいた。
これは、少年少女たちの戦いの記録。
汗と涙の、成長の物語。

『仮面ライダーネルヴ ― 鎗木憐は仮面ライダーである―』

ー勇者部に入らない？

このセリフを俺ー鎗木憐かぶらぎれんは何度聞いたのだろう。

隣の席の犬吠埼風は、毎日、そして毎時間授業後の休憩時間にそれを口にしてきた。もしくは、それに似ている言葉。

俺は部活に所属していなかった。というより、興味がなかった。スポーツに情熱を傾けるような性格でもないし、文化的趣味を持っているわけではない。彼女を始めとした部活に青春を注ぐ少年少女たちには申し訳ないが、そんな俺にとって部活とはまさに無駄な時間であつた。

2

「いや、ほんと興味ないんだって。ボランテニアとかする気もないし」

「そう言わないでさー。お試しでもいいからさ」

「一度入ったらお前絶対帰してくれないだろ」

「なぜわかった!?!」

「……帰るわ」

時間の無駄だよ、と言って鞆に教科書を詰めて教室を出ようとした。が、鞆に引つかかりを感じ、見てみると風が鞆を必死な顔で引っ張っていた。

「いいじゃんか！見学くらいしてよ！」

「嫌だつつつたら嫌だ！ぜってえ入らねえ!!」

「入らないとアンタの秘密バラすわよ!?!アタシにあんな事やこんな事をしようとー」

「してねえ!!つか教室でそんなこと言うんじゃねえ!!」

教室の後ろで騒いでいるが、クラスメイトたちは特に気に留めてい

なかった。このやりとりが毎日起こっている証拠であった。

「じゃあ、アタシは部活があるから」

「もう一生部室から出てくるな」

何事もなかったかのような顔で彼女は笑いながら部室へと向かっていった。

安堵のため息をついた俺はこの静けさを噛み締めながら靴箱へ向かい、靴を履き替え家路に着いた。

それにしても、だ。

「……なんで、俺なんだろう」

暇を持て余していそうな人間は、いくらでも心当たりはあった。自分たちのクラスにだっている。

だが風は迷わずに俺のところに来た。勧誘の誘い文句を毎日口走っていた。隣にはそれがわからなかった。

モヤモヤしていても仕方ない、と俺は髪を掻き毟り気持ちを切り替え、帰り道の代わり映えのしない風景には特に目もくれず歩いていた。

「なんでここにいの」

「部活って言ったじゃん？」

「部活じゃねーだろ」

「困ってる人を助けるのが、勇者部の活動内容だから問題ないわよ」

家の前には、扉の前でしゃかんでぼんやりとしていた少女がいた。先ほど部活と言って学校内で別れたはずの犬吠埼風だった。彼女は隣の姿を見た瞬間、俺の方を見て手を振り横に置いていた買い物袋を手に取り駆け寄ってきた。何となく、犬という言葉が思い浮かんだ。「どうせ適当に夕飯済まそうとしたんでしょ？良かったら、色々持ってきたから食べなさいよ」

そう言っ、袋の中を見せてきた。中には保存容器に入れられた種類色々、色とりどりのおかずが何品か入っていた。父親が家を空けがちで、食事はここ最近コンビニ弁当で済ましていた隣にとって、久し

ぶりの手作り料理であり、思わずごくりと唾を飲み込んだ。

「……いいの？」

「別にいいわよ。アタシとあんたの仲でしょ？」

手作りの夕飯を持ってきてくれるなんてどんな仲だ、と思った。

俺と彼女は小学1年生から今まで同じクラスだった。当時比較的人付き合いが苦手な俺にとって何かと話しかけてきたり気にかけてりしてくれる彼女は、友達というには少し距離が遠い、そんな気がした。が、頭を切り替えそれは自惚れだろうとそれを一蹴した。

――俺たちは腐れ縁だ。

きつとそうだと。自分に言い聞かせた。

「……じゃあ、いただきます。容器は明日返すから」

「りよーかい。成長期なんだから、しっかり食べなきゃ」

――お前はお母さんか。

母親がいたらこんな感じなんだろうかと少し重いビニール袋を受け取りながらそう思った。

「……なあ、犬吠埼」

「ん？」

「勇者部、次の活動いつ？」

「んーとねー。次は来週の幼稚園で読み聞かせをするんだけど……なんで？」

「まあ、こんだけされたらなんかしなきゃなーなんて思ってた」

そう言うのと、風は目を開けたり閉じたりしただけでしばらく他の動作をしなかった。

が、次の瞬間。

「ま、マジで!?!入ってくれるの!?!」

「まだそう言っていないだろ!?!……一回、どんなもんなのかなーって。自分の目で見えたかったから」

なーんだ、と最初こそつまらなさそうに言う風だったが、すぐにニコツと笑って、

「まあ、見てなさいよ。きつと1度見たら、勇者部の凄さに腰を抜かすと思うわ」

そう言った。

絶対抜いてやるもんかと、心から決意した。

その後、詳しい日程は明日説明するから部室についてきて、と俺に言い残したのち、彼女は自分の家路についた。

残された俺は右手の重みを感じながら、家に入った。

その日の夕飯は非常に豪勢だった。そして、美味すぎるその味に腰を抜かしてしまいかけたのだった。

次の日の放課後。日直の仕事を片付けなければならないので先に部室に行っておいて、と風に言われた俺は少し重い足取りで勇者部室へ向かった。昨日は勢いでそう言ってしまったものの、よくよく考えれば面倒な事をしようとしているのではないかと、昨日寝る前に思ってしまった、その気持ちのまま今を迎えていた。

部室の扉を開けてみると、流石部長が彼女という事もあるのか、きっちり片付いていた。と言うよりも、『そうではない』ものを感じた。

入ってすぐの手前にはパソコンが置かれており、その机の上を何となく、憐は擦ってみた。

と、それと同時に風が部室に駆け込んできた。

「ど、どうしたんだよ。そんな慌てて」

「あつ、いやー。待たせたら悪いかなって」

「さっき来たばっかだよ」

「そ、そっか。……まあ、座りなよ。何にもないけど」

「そのようで」

部屋の奥にあるパイプ椅子に座り、彼女はその向かい側の小さな黒板の前に資料片手に立った。黒板の横には、部員の名簿があり犬吠埼風という名前だけがそこにあった。

「じゃあ、始めよっか。今回の依頼は、近所の幼稚園からなの。ここだけじゃないけど、近くの保育園や幼稚園からは、よく依頼が来るのよ」

「へー。んで、今回も?」

「そぞ。今回は朗読会をすることにしたんだけど、読み聞かせはアタ

シがするから、あんたは効果音やBGMを流す担当して欲しいの」

「わりと簡単そうだな」

「ふふん、ところが大変よー？なんせアドリブに合わせないといけな
いこともあるんだからねー」

「台本通りでお願いします」

「しょうがないなあ、と言う風。本当に大丈夫なんだろうか、と俺は
少し不安を覚えた。」

「何を読むんだよ？絵本かなんか？」

「アタシが書いたオリジナル」

「えっ、シナリオとか書けんの？」

「ふふん、アタシの2000の技のひとつよ」

「お、おうそうか。……んで、どんな話？」

「あー。えつとね、まあ簡単に言うると勇者が悪者を倒す話」

なるほど、ヒーローものか。わかりやすい勧善懲悪は子供の受けが
いい。

3年もこの活動をしているからか、やはりその辺りは手馴れている
ように感じた。

「ところで、なんで勇者部なんだ？他にもあつたんじやないの？」

あー、と。少しバツが悪そうな顔をしながら頬を掻いていた風。や
がて諦めたような顔をして、口を開いた。

「……友達が、つけてくれたんだよ」

溜める必要あつたんだろうか。

そして時は吹っ飛び本番当日。

子供達が体操座りをして集まっている視線の先に、風が自作の本を
持って片手に読み聞かせてをしていた。

彼女の演技力は凄かった。時には優しく、時には激しく。そのシー
ンによって感情を変えていく。彼女は良い役者になれそうだ、なんて
そんな気がした。

そしてクライマックスシーン。魔王と勇者が対峙するところで、彼
女の感情も頂点に達していた。

『なんでこんな事をするんだ！もう悪い事はやめるんだ！』

『私を怖がって悪者扱いしたのは人間だろう！』

『話し合えばわかりあえる！だから！』

『話し合ったって、どうせ悪者にされる！』

『君を悪者になんかしらない！だから、一緒に行こう！僕たちがー』

台詞が途切れた。読み聞かせなので忘れると言う事はないはずだが。

風な顔を見ると、なぜか目を細めて、何かを思い出しているような、そんな感じに見えた。

だがすぐに彼女は本に向き直した。

『ーいるからー』

その台詞は、迫真の演技に相応しい物だった。

けどどこか、それを言う彼女は寂しそうに見えた。

「お疲れ、犬吠埼」

読み聞かせが終わり、後片付けをしている時。

子供たちはスタンディングオベーションをし、先生たちからも大好評でこの日の活動は幕を閉じた。

機材をしまつて、本を鞆に入れていた風に声をかけると一瞬少し疲れたような表情をしていたがすぐに笑顔に戻った。

「あ、お疲れ。燐もよかったよ、裏方として完璧」

「よせよ、照れる」

「本当のこと。……そうだ、よかったら帰りにー」

その時。

時は止まった。

何かの比喻ではない。そのままの表現であり、文字通りのことが起きた。それと同時に、懐に入れていたスマートフォンが、大きなアラーム音を鳴り響かせていた。

「な、なんだよ……？」

脳の処理が追いつかなかった。手に取ったスマートフォンに書か

れていたのはー。

『バーテックス警報』……?」

何が起こっているのか、俺には何一つわからなかった。だが、目の前にいる風は違っていた。

その顔は、まるで親の仇を見るような、憎悪が含まれた表情だった。

「い、犬吠埼? なんなんだ、これ」

「……あいつらが、来るんだ……」

「あ、あいつら……?」

風はバッグを置いて、幼稚園の外に駆け出した。それに続くように、俺もグラウンドに出た。

そして目の前の光景に、俺はさらに混乱した。目の前にいたのは奇妙な形をした、正しく『怪物』。異形の存在がそこにいた。

「な、なんだよあいつ!」

「バーテックス……」

「バー……テックス……?」

その名前を聞いた瞬間。異形の怪物は雄叫びをあげてこちらへ駆け出してきた。

「鏑木! アンタは幼稚園の中に逃げて!」

「ま、待て! お前は!」

「……これは、アタシのお役目だから」

風はそう言うと、スマートフォンを取り出してメニュー画面のアイコンの一つをタップした。

そのあと画面に現れた大きなスイッチのようなものをタップした瞬間、風の身体は光に包まれる。

俺はその光に視界を奪われるが、しばらくして光が弱まり、恐る恐る目を開くと、その目の前の光景に再び驚きを隠せなかった。

目の前にいたのは、髪色が金色に変わり、黄色を基調とした衣装に身を包み、その手に彼女の身の丈と同じぐらいの大剣を持った風の姿があった。

「い、犬吠埼?」

「逃げて! 早く!!」

普段のおちやらけた彼女からは考えられないドスの利いた声を聞いて、何か只ならぬものを察した。言われるがまま後ろを向いて、俺は幼稚園の中に戻った。

入口付近で再び風の方を見ると、彼女はその剣を軽々と振り、バーテックスと呼ばれた怪物と戦っていた。

非常に手慣れている、何となくその動きを見て感じた。

彼女の動きは明らかに戦い慣れていた。それは、何度も奴ら——バーテックスたちと戦ってきた経験があるということだ。

何故彼女が、と言う疑問もあればバーテックスとはそもそも何なのか、と言う疑問もある。今の状況を視認することはできても、その意味を理解する事はできなかった。

その時、風の背後に突如黒い影が現れた。

「犬吠埼！後ろ!!」

「もう一体いたの!?!」

もう一現れたバーテックスは、風を背後から襲う。

風の身体を持ち上げ、背後に投げ飛ばし、2体のバーテックスは並んで臨戦態勢を取っていた。

「2対1とか……卑怯でしょ!」

そう叫びながら、風は2体のバーテックスに突撃した。

剣を振り下ろし、1体にダメージを与える事はできたものの、もう1体の持つ爪が風の肩をかすめる。数の力は、やはり強かった。

そんな姿を見て俺は気が気ではなかった。

このままでは、彼女が目の前で死ぬ。それだけは、絶対にあってはならない。

それに気づいた時、身体は動いていた。

「やめろおおおおお!」

「か、鏑木！危ないわよ下がって!!」

聞こえない。聞きたくない。身体が彼女の言葉を聞くことを否定していた。

だが目の前の敵に丸腰で突撃は、やはり無謀だったかもしれない、と後で憐は思った。

予想通り、バーテックスに傷一つつける事はできないまま、バーテックスの振り回した手で吹き飛ばされた。

「いってえ……」

「鎬木…よくも……!」

剣を構え直し、バーテックスに再び立ち向かう風。しかし2体の連携に翻弄され、返り討ちにあってしまった。

ーこのままでは、殺される。

この状況では、そう考えざるを得なかった。

その時、目の前に先ほどまで持っていたスマートフォンが地面に落ちていたことに気づく。ホーム画面のままだったのだが、俺はそのホーム画面に違和感を覚えた。見覚えのないアイコンが幾つかあったからだ。

ただその中の一つは、つい先ほど見たものだった。横目で見た、変身する前に風がタップしたアイコンに似ていた。

……まさか、と。ある考えが思い浮かんだ。自然と頭の中に、それが出てきた。イメージは容易かった。

迷う必要なんて、どこにもなかった。でも、それを手に取るという事を、身体中のほぼすべての機関が拒否していた。

だけど、一つだけ拒否してないところはあった。

それを頼って、俺は地面に落ちたスマートフォンを手に取り、構えた。

「鎬木!？」

アプリを起動すると、画面の真ん中に玉のようなアイコンが浮かんできた。同時に、腰が締め付けられる感覚が憐を襲う。

視線を落とすと、下腹部には大きなバックルがあり、腰を覆うようにベルトが巻かれていた。また、バックルにはスマートフォンを横に刺し込めそうな場所があった。

俺は無意識で、そこに手に持ったスマートフォンを差し込み、顔を上げて、風の前にいるバーテックスを見つめ、叫んだ。

「……変身ッ!!」

『ヘンシンアプリ起動。モード【ネルヴ】ーローフラワーブロッサム』

気づけば、憐の全身は薄いピンク色の装甲に覆われ、花びらを散らしながら、彼はそこに立っていた。

「これが、俺の……」

『仮面ライダーネルヴ』が、そこにいた。

「鏑木……あんた……」

「……変身、できた……」

俺のその姿に、その場にいたバーテックスを含めた誰もが驚いていた。

しかし、その空気に痺れを切らしたのか、バーテックスの1体が襲いかかってきた。

「鏑木！」

「オラア！」

前に突き出した拳が、バーテックスにめり込み、その体を吹き飛ばした。

その光景に誰よりも驚いたのは、紛れもなく俺自身だった。

「……これなら！」

勢いづいた俺は、そのままもう1体のバーテックスに駆け出し、その勢いのまま真っ直ぐ拳を突き出す。続いて横からもう片方の腕でボディを狙い、よろめいたところに、回し蹴りを食らわせ、そのバーテックスも吹き飛ばした。

「今だ、犬吠埼！そいつで叩っ斬れ！」

「お、おっしやあ！でやああああ!!」

急なリクエストに戸惑いながらも、剣を更に巨大にして、そのまま2体ごと切断し、そのまま半分になったバーテックスは爆散した。

「や、やった……」

「まだ！御霊が残ってる！」

炎の中から、三角錐の物体が現れた。

「こいつを壊さないと、あいつらがまた復活する！」

「じゃあ、とつとと壊そう」

「生半可なパワーじゃ、ヒビがつけられないのよ。……ねえ、そのスマホに細長い小さな穴がない？」

ベルトのスマホを見てみると、たしかに横の部分に細長い何かが入りそうな穴があった。

「SDカードの挿入口か……？」

「ベルトの横の箱に、赤いチップがあるはずよ。それをその中に入れて、アプリをインストールして」

「お、おう……」

風がなぜそれを知ってるのかわからないが、俺はひとまず言われるがまま、ベルトの横に備え付けられた箱の蓋を開けると、中に幾つかのチップが並べられていた。その中には、風が言った赤いチップの存在もあった。

それを手に取り、バックルに取り付けられたスマホを一旦抜いて、挿入口に差し込む。すると、スマホの画面が光り、メニュー画面に新しいアイコンが浮かんできた。

『アプリインストール中…完了。【ヒツサツアプリ】起動』

「ひ、必殺アプリ……？」

「それを御霊に叩き込んで!!」

何をだよ、と言いかけた時右足から膝下までがピンク色の光に包まれ、そこから光でできた花びらが散っていた。

なんとなく、やらなきやいけないことがわかった。

「……そういう事かよー!」

御霊から距離を取り、構える。

一呼吸したのち、御霊に向かって一気に駆け出し、車1台分のところで飛び上がり、そのまま右脚を突き出し御霊に飛び蹴りを浴びせた。

その後着地したのちに、トドメと言わんばかりの回し蹴りをし、背後の粉々になった御霊が消えていった。

「……」
バーテックスは倒したが、俺には分からないことがたくさんあつた。

バーテックスとは何か。

風のあの姿はなんなのか。

そもそも、自分は何に変身したのか。

「……犬吠埼」

その答えはきつと、目の前の少女が知っている。

彼女は安心したような、悲しむような。

いろんな感情が渦巻いた表情をしてそこにいた。

第2話 「スノードロップ」

「あんたはね、仮面ライダーなの」

「仮面ライダー」

犬吠埼が何を言っているのかよくわからなかったが、真顔で言うもんだから、多分それは真面目な話なんだろう。

怪人たちを倒した後、幼稚園をそそくさと後にした帰り道のこと。あのバーテックスという怪物のことや風や俺のあの姿、なぜ時が止まったかなど。様々なことを質問した。風は分かっていたかのように特に躊躇することなくさらさらと答えてくれた。

「アタシたち勇者と共にあの怪物たち……バーテックスと戦う戦士のこと。……女の子が勇者なら、男の子は仮面ライダーって感じ」

「勇者……なあ。もしかして勇者部って、その勇者から来てんのか」
「……うん。まあ、ね。……それより、仮面ライダーになってどうだった？ 身体のどこかに変化はある？」

急な質問で少し驚いたが、どこもおかしなところはない。ライダーになる前に身体を打ったところが少し痛いぐらいである。

「特にねーけど」

「じゃあオツケー。……さーて。ねえ鏑木、明日予定ある？」

「それも特にねーけど」

「……フフツ」

「その笑い方不気味だからやめといたほうがいいよ」

不気味とか女の子に言うな、と怒られた。

「休みの日にうどんすりに来るってどうなの」

次の日というのは土曜日だった。

駅前に集合と言われ、何事かと思ったらそのまま風にわりと有名なうどん屋に連れて行かれた。

休日ということもあって人も多かったがどうにか奥の席に座ることができ、風は肉うどん2つ、と注文した。

「食বেনさいよ、アタシの奢りだから」

「どした、何かまたやらせる気か？」

「違うわよ、昨日のお礼」

「いや、あれ部活だからやったただけだし」

「じゃあ、勇者部入るってこと？」

あ、そうなるのね。

「……やっぱり、嫌だ？」

「嫌とかじゃなくてさ。……なんで、俺にそんなこだわんのかなって」
それは、本当に思っている事だった。

俺より暇そうなやつを紹介しようとしたが、風はただ部員を増やしたいとかそういうわけじゃない、と言っていた。

なら何故かと聞くと答えを濁すので気になっていたが、今なら何も
なく答えてくれそうな気がした。

それは、と風が口を開いた瞬間に目の前に肉うどんが置かれた。早い。
い。

とりあえず食べようと思い、割り箸に手を伸ばそうとした時。

「あら、2人とも久しぶりじゃない」

店員のおばちゃんが、そんな事を言った。同時に、視界の隅で風の
身体がビクリと動いた。

はて、誰かと勘違いしているのだろうか。俺は一度もこの店に来た
ことがないのだが。

「……ははーん、さては犬吠埼。お前俺以外の男とここに来たことあ
るんだな？」

「え？あら、貴方じゃなかったかしら。あらごめんなさいね」
と、そそくさと火だけを残しておばちゃんは厨房へ戻った。

これが本当にカップルだったらどうするんだ、と思い改めて箸に手
を伸ばそうとするが、一方の風は微動だにしなかった。

「犬吠埼〜？どした？」

「……う、うん。多分、誰かと勘違いしてるんだらうね。はは、ははは」
風も割り箸を手にとって、早々とうどんを頬張った。

気になる態度ではあったが、とりあえず腹が減っていたため俺も続
くようにうどんを啜った。一言で言うとも最高だった。

それからの風は態度が変だった。

駅へ向かうまでの道、行く時はペラペラとよく喋っていたが帰り道はほとんど喋っていない。しかも何より、あの大食らいだった風が一杯しかうどんを食べていなかった。

そういえば、あの店員に言われてから様子が変だ。何か触れちゃいけない事に触れていた、そんな感じだった。気づけば既に駅前。ここで解散かと思っていたが、風の様子が相変わらずだったので、とりあえずベンチに座らせる事にした。

「……で、どうしたんだよさつきから」

「……」

こんな感じである。

ラチがあかないと思った俺は、一息ついて犬吠埼、と彼女の方を見て名前を呼んだ。

ようやく彼女は、こちらを見た。

「……元カレはどんな奴だったんだよ」

「……はあ?」

何言っただこのアホ、とでも言いたげな顔だった。申し訳ないがこっちのセリフである。

全力のはあ?を堪能した一方で、彼女はため息をついて空を仰いだ。今日はいい天気である。

「元カレとあそこに行ったのはいいけどそれを店員に触れられて、元カレとの思い出がどんどん溢れて辛かったんだろ? いいんだ、長い付き合いの俺が話を聞いてやるから。話してみな」

「……ばっかじゃないの」

「バカ!」

「アタシ、元カレとかいないけど」

「うっそ、なんかチア部の応援行った後に五十嵐に告られたんじゃないの?」

「振ったわよ。好きじゃなかったし」

「あいつめちやくちやシヨック受けてたぞ」

「ちゃんと和解したからいいの」

「お、おう」

となると、である。

「……あのおばちゃん、誰と勘違いしてたんだ？」

「さーねー」

よつこらせ、と立ち上がった風。女子力云々言ってる人間がそれはどうかと思うぞ。

「じゃ、また明後日。ちゃんと部活に来るのよ？」

「おう」

……おう？

あ、と気づいた時には既に時遅しという奴だった。

目の前にはにやにやと嫌な笑みを浮かべた風の顔があった。

「今の返事、忘れないわよ？」

「あ、いや違つ……」

弁解しようとする前に、彼女は既に目の前からいなくなった。気づけば走れば間に合いそうではあるものの距離を空けられてあり、わざわざ改めて弁解するには面倒な位置にいた。

俺は諦めて、こっちに手を振っている彼女に手をふりかえすことにした。

「……まあ、いいか」

その明後日である月曜日。朝から元気そうな彼女の後ろ姿を見ながら、ぼんやりと授業を受けていた。

今日は何をやらされるのか不安に駆られながら、気づけば昼休憩だった。とりあえず昼食を取ろうと鞆を漁っていると。

「聞いたぞ鏑木、勇者部の話」

「話はえーよ……」

友人の一人である直江大（なおえひろし）がニヤニヤとしながら俺の前の椅子に座った。そこは風の椅子だぞ。

「まあ俺は嬉しいよ。お前がちゃんと部活をやってるようで」

「もう3年にもなつて今更何やってんだって話だけどな……」

「それでもだよ、帰宅部は受験の時受け悪いぞ？」

受験。そんな言葉聞きたくなかった。

ため息をつきながら、コンビニで買ったパンを取り出し袋を開けて一口。美味しい。

「犬吠埼の想いが実ったわけだ」

「変なこと言うなよ」

「へーへー。……ま、頑張れよ」

なぜか肩をポンポンと叩かれた俺。直江は弁当を開けて「今日も愛さんの弁当美味そうだなー」とか言いながらもぐもぐと頬張っていた。

そんな感じで昼休憩も終わり、午後の授業もぼんやりと受けたのち、風と2人で部室へ向かった。

中は相変わらず人もおらず寂しそうだったが静かでいい気がした。

……いや、なんか寂しいな。

「他の部員いないのか？」

「……あー。まあ、いいじゃん」

いいのだろうか。

なんか雑に返されたが特に気に留めずとりあえず空いてる席に座った。

「今日はどーすんの」

「何する？」

「ノープランかよ……」

仕事がないときはとことん暇なのだろう。机に頬をつけてスマホを突き始める風。

「依頼は来てねーの？」

「来週、裏庭の掃除を頼まれてるぐらいねー。他は何にも」

「それは雑用というのでは」

「いいのよ、勇者は人の為に働くんだから」

「なんか都合よく丸められてる気がする……」

気のせいよ、とスマホを机に置いて背伸びをする風。こんなんでいいのだろうかと思いつながらまあ忙しいのは性に合わないので、この方

がいいのかもしれない。

会話が途切れたので、話す話題を探そうとしばらくぼんやりしている。

「……って、そんなこと言ってる場合じゃねえ。あのバーテックスって奴のことだよ。なんだあいつ」

すっかり聞くのを忘れていた。風も思い出したかのようにそう言えば説明してなかったわね、と言いながら黒板の方へ向かった。

「人類の天敵……って言えばいいのかな。私たちが住んでるこの世界の外はウイルスが蔓延してるってのはわかってるわよね？」

「教科書で読んだくらいだけど、まあ」

「奴らはその外の世界から来てるの。神樹様を倒すのが、奴らの目的なの」

神樹様。ウイルスで滅亡しそうになった人類を救ってくれた物らしい。その正体などについては俺はよくわからないが、わりとトップシークレットなものらしい。とにかく、俺たち人間はその神樹様のおかげで今日も生きていられている。

「その神樹様を倒そうとしてるのがバーテックスで、そいつらバーテックスを倒すのが、勇者と仮面ライダー、ってわけか」

「簡単に言うтそういうこと」

「……すつごく今更なんだけどさ、俺はなんで仮面ライダーになれたんだ？」

「アタシたちと同じよ。……神樹様を選ばれた、それだけ」

「選ばれるような事なんてしとらんぞ俺……」

無作為に選ばれるらしいから、と言われたがあまり納得できない。急にそんな事を言われても、中々気持ちの整理なんてつけることはできない。

「……にしても、まさかお前が勇者とはなあ」

「意外？」

「意外っつーか。そんな感じなかったじゃん。黙ってなきやいけないのは知ってたけど」

勇者は人知れず戦う戦士のようなものだった。歴史の授業で習っ

た程度の知識だが、お役目という重要な役割を担う為に選ばれる少女の事を言うらしいが、まさか男にまでその役目が回ってくると聞いてもなかった。俺が聞き逃しただけなのだろうか。……そんな事はないと言い切れないのが悔しい。

「……戦うの、怖い？」

唐突に風がそんな事を聞いてきた。俺の心を見抜いたかのようで少し怖かった。

「……無理もないわよねえ。急にそんな事言われても、って感じだもん」

「……」

「でもね、 錆木」

突然横に座ってきた風は、まっすぐに俺の瞳を見ていた。

「これは、 錆木がやらないといけない事だから」

「……」

「納得できないかもしれない。でも代わりは、他にいないから」

勝手なこと言うなよ、と言いたかった。だけどそれが何故か口から出てこなかった。まるで誰かが言わせないとしているかのようで。

言葉に詰まっていると、風は立ち上がって鞆を持った。

「今日はもう帰ろ？また明日」

「お、 おい犬吠埼ー」

部室を一足先に出た風は、そのまま扉を閉めた。

1人部室に残された俺は、気持ちの整理もつけられぬまま、また外を眺めた。外では部活をしている生徒たちが元氣よく走り回っていた。

こうやって彼らが部活ができるのは誰のおかげだったのか、まるで開いてはいけないパンドラの箱を開けたような気分だった。

モヤモヤしたまま、俺も帰ろうと鞆を手に取ろうとした時だった。

「!？」

けたまましく鳴るこの音は、あの日聞いたバーテックス警報の音。携帯を見ると画面にそれが表示されていた。

出現場所を確認すると、学校内だった。

とにかく走って、バーテックスのいる場所へと向かっていった。

場所は空き教室で、扉を勢いよく開くと、そこには先日見たタイプとは異なる顔立ちをした怪物ーバーテックスがいた。

こんなところで暴れさせるわけにはいかない、とメニュー画面のアイコンをタップする。

「……はあ!?!」

だが、何も画面が出てこなかった。故障している様子はなく、何かのバグだろうか。

こんな時に、と苛立ちを隠せなかった。一方のバーテックスは俺の存在に気付き、俺に向かって突進してきた。

「くそー!」

それを避けると、バーテックスは壁に激突した。すると、激突した壁がバーテックスが離れた同時に色に変色し、枯れた葉のような色をした。

「こいつをほったらかしにすると、学校が……!」

バーテックスに侵食されてしまう。学校だけじゃない、恐らく四国自体がこうなってしまう。

どうにかしたいのに変身できない。それに苛立ちを覚えるがそうこうしてるうちにバーテックスが立ち上がり再び俺に襲いかかってきた。

やられる、そう思った瞬間。

「鏑木!」

どこからか声が聞こえ、気づくも目の前のバーテックスが再び教室内に吹き飛ばさていた。

顔を上げると、そこには変身した犬吠埼の姿があった。

「大丈夫!?!」

「あ、ああ……!」

「まさか学校にまで出てくるなんて……!」

剣を構え、吹き飛ばされた方向を見据える犬吠埼。

埃と煙が晴れると、バーテックスがゆっくりと立ち上がり、こちらを睨むかのように仁王立ちしていた。

「犬吠埼、変身できないんだ。なんでかわかるか!?!」

「変身できない……?」

犬吠埼も困惑していた。どうやら彼女にも理由がわからないらしい。

だがバーテックスは待つてくれる様子はなく、再び俺たちに襲いかかってきた。

振り下ろした拳を犬吠埼は剣で受け止めた。

「っ……! 鎚木! アンタは逃げて!」

「でも犬吠埼!」

「早く! アタシがなんとかするから!」

俺も加勢したい。なのに、変身できない。役に立たない自分がここにいても仕方がない。

俺は黙ってその場を後にしようと駆け出した。

——逃げちやダメ!

「っ……!?!」

——絶対大丈夫ですから! 先輩は、弱い人じゃないから!

——だって先輩は——。

——『仮面ライダー』なんだから!!!

誰の声だかわからない。

だが、その声が頭に響いた途端、少しだけ頭がクリアになった。

——そうだ。なんで逃げてるんだ。

振り返ると、犬吠埼がバーテックスを弾き飛ばし、教室に放り出していた。

「鎚木!?!」

「そっだよな……」

やっとわかった。変身できなかった理由。

怖かったんだ、俺は。

なんで戦うかもわからないで、ただやれって言われて。納得できないまま戦うなんて、ダメだよな。

「……俺は戦う。だって俺はー」

「ー世界のために戦う、仮面ライダーなんだからな！」

アイコンをタップすると、ようやくアプリが起動した。その瞬間、ベルトが腰に現れた。

『変身アプリ起動』

「勇者部五箇条！『なせば大抵なんとかなる』だ!!」

そうだ、こんな事でビビってたまるか。

世界は、俺が守るんだから。

「変身ッ!!」

『モード「ネルヴ」フレーザーブロッサム』

スマホをバツクルに装填し、変身した。全身に力がみなぎってきた。

バーテックスが立ち上がり、再び俺たちに向かってきた。しつこい奴だ。

「ハアアアア!!」

こちらにもバーテックスに向かって駆け出し、すれ違いざまにパンチを胸に向かって叩きつけた。よろめいた隙に蹴りを食らわせ、顔面に拳を打ちつけ、教室の壁にバーテックスを吹き飛ばした。

「こいつでトドメだー」

ベルト横のケースからSDカードを取り出し、スマホ内に差し込む。

『ピツサツアプリ起動』

その瞬間、ピンク色の波動が拳に集まった。

壁にもたれてよろめいているバーテックスに向かってその拳を叩きつけると、バーテックスはうめき声を上げ、そのまま例の御霊へと形を変えた後、それが爆散した。

「やった……」

ドツと疲れが出てきて、そのまま変身が解除された。

その場に座り込むと、風が変身を解除して駆け寄って来た。

「大丈夫？」

「あー……うどん食いたい」

その場に大の字で倒れてぼんやりと天井を見上げた。

さっきの戦いで天井が壊れている。……誰が治すんだろ、これ。

「じゃ、帰りに食べに行きますか」

風が嬉しそうに手を差し伸べて来た。俺はその手を掴み、引っ張ってもらった。

「教室どーしよ」

「後始末は大丈夫。大赦がもう来てると思うから」

「大赦って……あの大赦？」

大赦は、神樹様を祀っている組織。父親も働いており、その実態はあまり世間には知られておらず、俺もあまり詳しいことは知らない。

「アタシたちの勇者システム、そしてライダーシステムも、大赦が開発したの。アタシたちのバックアップね」

「ふーん」

まあ、大丈夫ならいいんだろう。

ちよつと引け目を感じながら、俺たちはボロボロになった空き教室を後にした。

「そーいや、犬吠埼」

「ん？」

うどんを食べた帰り。辺りはすっかり暗くなっており、流石に夜道を1人で歩かせるのはまずいと思い、風を家の近所まで送っていた。

「樹、元気にしてる？」

「っ……」

風が立ち止まった。何かまずいことを言ったのかと思ったが、彼女の妹である犬吠埼樹について聞いただけのだが。

ひよつとすると喧嘩でもしているのか、と思ったが喧嘩をするような姉妹でもないので少し不思議に思った。

「……うん、大丈夫だよ」

「そっか。ならよかった」

「じゃあ、アタシはこの辺で」

またね、と風は手を振りながら走り出した。

夜空の下に残された俺は、妙な風に引っかけりを覚えながら家路に着いた。

そういえば、土曜にうどん屋に行ってから様子が変だ。

そう、それはまるで……。

「何か、俺に隠してんのかな」

第3話 「姉妹と猫と」

いつのことだろうか。幼い風と樹が、公園で仲良く遊んでいた。そこに俺が入って、3人で砂遊びをし始めた。

ああ、これはいつかの時の夢だろう。毎日が楽しくて、希望に満ち溢れていた日々。

なのに何故だろう。いつから、こうなったんだろう。

樹、元気かな。今何してるんだろう。

明日、風に聞いてみよう。

……あれ、俺、そういえば。

——なんで風の事、犬吠埼って呼んでんだろ。

遠くで、アラーム音が鳴っている気がする。

先に部室に行っていて、と言われて。なんかいつの日かもこんなだった気がすると思いつつながら、先に部室へ向かった。

部室に入ると、いつも通りのガラリとした空間で。やっぱり何か寂しい。

鞆を置いて、椅子に座ってぼんやりと窓から外を眺めた。今日は何を話すのだろう。また例のモテ話を聞かされるのだろうか。はたまた、依頼が入ったと言ってその打ち合わせでもするのか。

色々考えていると、背後でガラリと扉が開く音がした。

ようやく来たか、と振り向くと。

「あ、あれ？」

似た色の髪。多分髪型やや変えたら、きつと同じような顔になるんじゃないかなと思うぐらいには似ている彼女は、俺が思っていた人ではなかった。

「い、樹？」

「……」

そこにいたのは、風の妹である樹だった。

想像していた人とは違ったので拍子抜けだったが、それよりも懐か

しくて嬉しいものが胸から込み上げてきた。

「久しぶりだな、樹！元氣してた？」

「……」

「？」

何で何も喋らないんだ。それに、彼女の顔は俺のこの感情とは対照的で、何か言いたげで、というよりどこか怯えているように見えた。

あれ、俺なんかやったっけ。

2人の間に沈黙が走ると、どこからか忙しそうに足音が聞こえてきて。

「樹!？」

慌ただしい足音の主は風だった。

「あ、お姉ちゃん……」

よかった、喋れたのね。

「もう……先に行くなら行くって言いなさいよ」

「ごめんなさい……。でも、その……」

「そうよね。早く『お兄ちゃん』に会いたかったもんね」

「お、お姉ちゃん！」

顔を真っ赤にして反論する樹。そこ反論されるとちよつと悲しい。

「あ、あの……えっと、久しぶり、です。か、鏑木先輩……」

「昔みたいにお兄ちゃんでもいいのに」

「う、うーんそう呼びたいけど……今は学校だから」

「成長したなあ、樹……」

兄ちゃんは嬉しいよ、と泣くふり。

鬱陶しいと思ったのか、風はと言えばはいはい、と適当にスルーした。辛。

「樹も勇者部だから。これからよろしくね」

「とうか、この学校にいたのな。2学期だつてのに、1度も見なかったからどうしたんだろうと思っただけ」

「そ、それは……」

「まあ、そこそここの学校人数多いから」

「いやそれでもねえだろ」

それはさておき、と議論をぶつ切りにされ、樹と俺は椅子に座らされ、風はいつものように黒板の前に立つ。

「樹が勇者部に参加するということでお祝いをしたいところだけど、依頼が入ってるから一先ずそっちを優先するわね」

「どんな依頼なの？」

「迷子の猫探し。他のクラスの子からの依頼」

迷子の猫探しとな。なんというか、本当にこの部なんなんだろう。何と思われてるんだろうか。

世間のこの部に対する見方が気になるところではあるが、ひとまず部長の言う通り猫探しをする事となった。

「いなくなったのはいつなんだ？」

「昨日。いつもなら夕方には戻ってくるらしいんだけど、昨日は戻らなかったらしくて心配だからって」

「昨日って事は、まだそんなに遠くへは行ってないかもしれないね」

樹がそう言うと、風も頷いた。

とりあえずその子の家の近辺から探すと言うことになり、家を起点に3人とも個別に探す事となった。

風から受け取った猫の画像を片手に、近くをいろいろ歩いて回った。

しかしそう都合よく見つけれられるはずもなく、時刻は5時を回った。

今日は引き上げたほうがいいのではという考えが頭に浮かんできた時。グループチャットで風が猫を見つけたというメッセージが届き、彼女のところに集まる事となった。

どうやら近所の猫の集いの中にいたらしく、何匹かの猫の中に目的の猫が呑気に寝ているところを発見したとのこと。

到着すると、そこはビルとビルの間路地裏だった。

「全く、人騒がせな猫ねえ」

「ま、見つかって良かったよ」

「そうねえ。そういえば、樹遅いわね」

「遠くにいたんだろ。とりあえず猫捕まえてとつと飼い主に引き渡

しに行こうぜ。もう暗いし」

そうね、と猫の集いの輪に、風が入ろうとした時。

スマホからバーテックス警報が突如鳴り響いた。

「バ、バーテックス!」

「どこだ!」

居場所の確認をしようとマップを出すと、すぐ近く、というより真ん前。

顔を上げると、猫の集団のその奥に、バーテックスがいた。

だが時間が静止しているため、猫たちは逃げるできない。このままでは猫たちが奴らに襲われる。

「やべえー!」

走りながら変身アプリのアイコンをフリックし、現れたボタンを押す。

「変身!」

『モード【ネルヴ】ーフラワーブロッサム』

そのまま変身した俺は、猫の集団に近く前にバーテックスをその場から引き離し、路上へと投げ飛ばし、立ち上がるうとしたバーテックスを顎から蹴り上げ、拳を胴体に2発浴びせた。

「あ、アンタの戦い方って結構容赦ないわよね……」

「気にすんな!」

よろめいたところを蹴り飛ばし、とどめを刺そうと必殺メモリーを差し込もうとした時だった。

バーテックスを蹴り飛ばした先の反対側の路地裏から、人影が見えた。

「い、樹!」

それは、俺たちがよく知る人物であった。

樹は肩で息をしながら、驚いた様子でこちらを見ていた。

なぜこの状況下で樹が動けるのか定かではないが今はそんなことを気にしている場合じゃなかった。

「樹!逃げろ!!」

だが、樹が逃げる前にバーテックスは彼女に襲いかかった。樹は捕

まり、身動きが取れなくなっていました。

「きゃあああああ！」

「くそー！」

「楠木！メモリーケースの中に、黄緑のメモリーがない!？」

突然風がそんなこと言い出し、何を言ってるのかと思ったがケースの中を見ると確かに黄緑の色のメモリーチップがあった。よく見ると、他にも紅と青と黄、桜色のカードが中にあり、ひとまず風が言った黄緑のメモリーチップを取り出した。

「それをスマホの中に！」

「あ、ああ！」

スマホをバツクルから取り外し、メモリーチップを差し込んだ。

すると、スマホのメニュー画面に新たなアイコンが加わり、それをタップした。

『チェンジアプリインストールー完了。チェンジアプリ起動』

「チェンジアプリ？」

『モード【ネルヴ】ーフラワーグローリー』

すると身体が発光し、装甲の一部が変化して全身の色が桜色から黄緑色へと変化した。

なるほど、さっきまでの形態が『フラワーブロッサム』で、これが『フラワーグローリー』というわけか。

「指の先から、ロープが出る！それで樹を！」

「お、おう！」

言われるがまま、指先に力を込めると黄緑の指の数と同じ数だけのロープが現れた。片手のロープでバーテックスの足を絡めて引っ張りバランスを崩し、もう一方のロープを樹の身体を絡めてこちらへ引っ張った。

「樹！」

空へ投げ飛ばされた樹の身体を風がキャッチした。

「樹、大丈夫!？」

「うん！」

「あいつは!？」

バーテックスの方を見ると、立ち上がった俺たちに向かってエネルギーで出来た弾丸を撃ってきた。

「させるかー」

再び指先に力を込めてロープを出し、それを俺たちの周囲に展開してロープの壁を作り、エネルギー弾を防いだ。

「す、すげえ……これなら！」

ロープの壁を俺の周りに展開し直し、そのままバーテックスに体当たりをした。

硬い壁のような物に真正面から衝突したバーテックスはそのまま吹き飛ばされ、ビルの壁を突き破り中へと消えていった。壁を解除し、とどめを刺そうと中に入る。

「あ、あれ？」

だが、そこにバーテックスの姿はなかった。どうやら逃げられたらしい。

「ちっ、引き際はわかってるってわけか」

変身を解除し、ビルから出ると時間はまた動き始めていた。

風は探していた猫を抱いて、樹がその猫の頭を撫でていた。とりあえず依頼の方は無事に終わったようで。

逃げたバーテックスの方が気になるが、一先ず猫を飼い主の元に届ける事になり、俺たちは依頼人のところへ向かった。

「え、帰ってない？」

「友達と遊びに行ってるかもって。猫は一先ず家族の人に預けたけど」

飼い猫が帰ってきてないって騒いで人に探してもらおうように言った割に呑気な人だな、と思いつつも依頼は完了した為また明日でも学校で本人に言えばいいだろう、という結論になった。

「さーて、では樹の歓迎会をやりましょうか！」

アタシ達の家でいいわよね？と、俺に確認を取ってきた風。

「いやまあいいけど、大丈夫なのか？色々」と

「何が？」

「あー。まあいいや。うん、行こう」

女の子2人だけが住む家に果たして年頃の男を入れていいのか、という意味で聞いたのだがまあ気にしてないようだ。ちやんと言葉にして聞くべきだったろうか、と思っただが楽しそうにしている犬吠埼姉妹を見るとまあいいかと思っってしまった。

風と樹の両親はいない。最初からいないと言うわけではなく、風が中学1年生の時に亡くなった。詳しいことはよく覚えていないが、確か事故だったと聞いた気がする。

俺も犬吠埼家にはよく遊びに行っていたのでお世話になったし、当時俺もかなりショックだったのは覚えてる。

キッチンに向かっていている風の後ろ姿をぼんやりと眺めながら、何となくそれを思い出した。

「か、鏑木先輩」

「……………学校じゃないよ?」

「うー……………」

「……………どしたの、樹」

久しぶりだからか、樹の態度もまだぎこちない。あんなに遊んだのに、そこまで畏まらなくても。

軽くショックだったが、樹の成長の証だろうとここは欲を出すまいと耐える事にした。

「あの、身体、大丈夫ですか?」

先ほどの戦いの事を言ってるのだろう。

そういえば、樹の前で変身解除してしまったので、俺がライダーである事を知られてしまった。いいのかなと思っただが風も特に何も言っただけだったので多分大丈夫なのだろう。

「大丈夫だよ。樹こそ、大丈夫だったか?」

「は、はい。大丈夫、です」

うーん、これは慣れてくれるまで時間がかかりそうだな。

「なーに、アタシの妹を誑かさなくてくれる?」

背後からすこし機嫌の悪そうな声が聞こえると思っただけ振り返ると、お盆にいろんな料理を載せて立っている風がいた。

「誑かしてなんかねえよ……」

「じゃあよろしい。樹、着替えてきたら？」

「うん。わかったー」

樹がそう言うのと、すぐ横の本人の部屋らしきところに入って言った。

その間に風は料理を机の上に並べる。

「なんかするよ」

「いいの。あんたは座ってて」

「……んじゃ、まあ」

申し訳ない気持ちになるが、ここは風の言う通りにした。

こうして見ると、本当に女子力の高い女の子だな、なんて思う。

気が強いところもあるし、よくわからんテンションになる時もあるが両親や樹の事もあるから長女としての責任を感じるところがあるのだろう。全く、本当にこいつはー！

ー！大丈夫だから。

ー！俺が、風を守るから。

「……？」

「おーい、何ボーツとしてんの？」

ハツとすると、すでに料理を運び終え着席している風と着替え終えた樹が俺の顔を覗き込んでいた。

「あー。わりい。食べようか……って」

テーブルをよく見ると、素うどんにさぬきうどん、肉うどんに温玉うどんと所狭しとたくさんうどんが並べられていた。

2人はというとまだかまだかと待ち焦がれていた。なぜかぶんぶん引きちぎれるのではないかと思うくらい振っている尻尾が見えてきた。

「……いただきます」

「いただきますー！」

ちなみにうどんは絶品だった。

「はあ？結局学校に来てない？」

次の日。風から昨日の依頼人が今日学校を休んでいるという事を聞いた。

「友達と遊びに行つて、はしゃいで風邪でも引いたのか？」

「先生に聞いてみたんだけど、どうやら家にも帰ってないらしくて。ちよつとした騒ぎになつてるらしいわよ」

「……」

まさか、何か事件に巻き込まれたんじゃないだろうか。

嫌な予感が頭をよぎると同時に、風がスマホを片手にちよつとごめん、と席を外した。

色々気になるところもあるが、とりあえず放課後に今後の行動を決める必要があるそうだな。

そう思っていると、風が真剣な顔をして戻ってきた。

「楠木。放課後、予定ある？」

「いんや」

「ちよつと一緒に来て。あの依頼人の事もあるから」

「……わかった」

どうやら、事態は思ったより深刻らしい。真剣な彼女の顔を見てそう確信した。

放課後。風と共に校門から少し外れたところに連れて来られると、そこに黒塗りのセダンが止まっていた。

俺たちがその車に近づくと、運転席のドアが開く。そこから、白い束帯を着た人間が現れ、後部座席のドアを開けてくれた。

「な、なあまさかこの人……」

「大赦の人間よ」

小声で尋ねると、風が答えてくれた。

「――大赦が出てくる？何がどうなってるんだ。」

風が続くように車に乗りながらこれはどうやら只事でないという事がヒシヒシと伝わってきた。

やがて俺たちを載せた車は発進した。重苦しい空気が車内を包んでいた。

「……なあ、何があったんだ」

「……確証はないから、はつきりとは言えないけど……」

——昨日現れたバーテックス、もしかすると。

風がそう言った瞬間。突然前方から大きな音がして、俺たちの身体は前へと投げ飛ばされた。

前方のシートがクツションにはなったが、頭を打って感覚が宙に浮いている。

フラフラとする頭を無理やり起こしながら、隣の風を見る。

そこには額から血を流す風の姿があり、サツと血の気が引くのを感じた。

「ふ、風?! 大丈夫か!」

「え、ええ……」

意識あるらしい。どうやらシートではなく、ドアの側に頭を打ってしまったらしい。

ハンカチをポケットから取り出し、風の額に当てた。

「とりあえずそれ当ててろ……!」

運転手の方を見ると、エアバッグにもたれこむように倒れていた。うめき声が聞こえたので、まだ息はあるようだ。

動けるのは自分だけだったので、状況を確認すべく、変形しているのか中々開かなかったドアをどうにか力を入れてこじ開け、前方を見ると。

「!?!」

そこには、昨日のバーテックスが車の前に立っていた。

だがバーテックス警報は鳴っていない。なのにどうしてバーテックスがここに。

だがバーテックスは、わからないことばかりで混乱している俺に気にせんとばかりに飛びかかってきた。

第4話 「声のカタチ」

「ッ！」

間一髪のところまで横に転がるようにしてバーテックスの攻撃を避けた。

とにかく身動きの取れない2人から離さなければ。スマホを手に取り、ヘンシンアプリを起動する。

「変身ッ！」

『モード【ネルヴ】ーフラワーブロッサム』

バーテックスに駆け出しながら、変身完了したと同時にバーテックスの肩を掴み、車から距離を取るように引き剥がす。

幸いこの辺りはどこかの山道らしく人の姿もない。他の人を巻き込む事もないだろう。

適当にところにバーテックスを投げ飛ばした俺はそのまま蹴り飛ばそうとするも、それを避けられ、エネルギー弾を撃たれ直撃してしまった。

「ッ……！やりやがったな！」

スマホを手に取り、チェンジアプリを起動しグローリーのメモリーチップを中に入れた。

『チェンジアプリ起動。モード【ネルヴ】ーフラワーグローリー』

フラワーグローリーに変身し、ワイヤーを取り出すとそのまま飛び上がり、勢いをつけたワイヤーをそのまま鞭のように叩きつけた。

バーテックスの身体に数本が当たり、衝撃で後ろへよろめかせることができた。

その間にヒッサツアプリチップを手に取り、スマホに差し込んだ。

「今度こそ年貢の納め時だ！」

『ヒッサツアプリ起動ーブレイヴファイニッシュ』

両手のワイヤーをバーテックスに向かって放つと、それがバーテックスの身体を包み込み、絡みつくワイヤーを手前に引っ張り、締めつける。

「取ったあ！」

だがその瞬間。先ほどまであったワイヤーの手応えが急になくなり、拍子抜けしてしまう。ワイヤーが解かれると、そこにはいたはずのバーテックスがおらず、辺りを見渡す。すると、頭上に先ほどのバーテックスではない別のバーテックスが、ワイヤーに巻かれていたバーテックスを抱えていた。

「チツ、お仲間か……」

バーテックスはそのまま森の中へと消えてしまった。

深追いをして仕方がない、と判断すると変身を解除する。

同時にスマホに電話がかかってきて、画面を見ると風の名前があった。

「犬吠埼、大丈夫か？」

『なんとかね。あんたは？』

「あと一歩で逃げられた」

『そう。とりあえず大赦の人がきてるから、こっちに合流できる？』

「りよーかい」

通話を終了し、ひとまず風たちと合流すべく回れ右をする。

しかしそこで、大事なことに気づいた。

「……………どこだ」

「犬吠埼さん、鏑木さん、お疲れ様です」

「ーほんと疲れたわ。」

どうにか合流できた後、別の車で改めて目的地へ向かい、やがて大赦の建物らしきところに到着した。

入り口に立っていた白い面をつけた大赦の人間は、ひとまず俺たちに挨拶してきた。

「詳しい話は中で。犬吠埼さんは、治療も受けてください」

「わかりました」

「敬語のお前ってなんか珍らーうげっ」

思い切り足を踏まれ、無理やり黙らされた。いてえ。

中も外もそうだが、何というか大きな寺のようで和風の建物だった。

ホールを抜けて、会議室のようなところに通され、風は手当てのためには入らず、俺のみここで待つこととなった。

スマホを突こうとするも、ここへ来る前に大赦の人間に預けてしまいい、する事がなかった。

部屋をうろちよろとするがすぐに飽きてしまい、結局椅子に座ってグルグルと回っていると頭にガーゼをつけた風が部屋に入ってきて、続けて入ってきたのはー。

「お、親父!？」

「……まさか、こんなところで会うとはな」

そこにいたのはまぎれもない、自分の父親だった。

父親は俺が幼い頃からよく家を空けており、遊んでもらった記憶があまりない。

一方、母親は既に死んでいる。その辺りも正直覚えていない。多分、物心がつく前にでも死んだのだろう。

所謂鍵っ子という奴だった俺は、家に帰っても渡された夕食代で食事をして寝るだけ。そんな毎日だった。

自然とコミュニケーション能力が欠如していき、友達も少なかった。まあいいか、と当時思っていたある日。体育の時に2人組を組めと言われた時だった。ベツタバタな話だが、当然友人のいない俺に気軽に組もうと言える人間なんていなかった。

このままこっさり抜け出してしまおうか、とさえ思った時。

ーねえ、アタシ組も!

多分、これがきつかけだった。

それが犬吠埼風だった。なんでこんなぼつちに声をかけてきたのだろうと今でも思う。

「……ライダーになってから、身体はどうだ？」

「知ってたのか」

「ライダーシステムを作ったのは、俺だからな」

かぶらぎひとし
鏑木仁は、淡々とそう言った。

席に座り、風と俺を挟んだテーブルの向こう側に親父が座って話をしていた。

よく考えるとそうだよな。あのスマホにそんなシステムを黙って入れられるのは、身内しかいないから。

「……別に。特に変わんねーかな」

「そうか。ブレイヴチップーあのメモリーチップを使うときに不具合のようなものは？」

そんな名前だったのか。

「いいや、ない」

「経過は順調、か」

ファイルにメモをし始める親父。

「……なあ親父。なんで黙ってたんだよ？ライダーシステムをスマホに勝手に入れたのを」

「……」

だんまりかよ。

まあ、そういう人なのはわかっていたのでその質問は置いておくことにした。

「で、俺らを呼んだのはなんだ？」

それを言うと、ふむ、と言って立ち上がり部屋の照明を消すと俺たちの方向にスクリーンが降りてきて、そこに映像が浮かび上がった。

その映像には、非常に巨大な怪物のようなものが映し出されていた。

「な、なんだこいつ。まさかバーテックスか？」

「ああ。そのまさかだ」

デカすぎるだろ、と絶句する。

「お前や犬吠埼さんが戦っている人型のバーテックスは、最近現れた新種だ。バーテックスが人類に現れてからの長い歴史の間で、初めて確認した種類でな。このバーテックスは、その新種が現れる前に出現していたバーテックスだ」

「……マジか」

「新型バーテックスは、1ヶ月前の戦いで神樹様の力が大幅に弱まり、

樹海化をする事ができなくなってから現れた。おそらく、バーテックスがこちらの状況に合わせて個体を調整したのだろう」

「1ヶ月前の戦い……？」

「……！」

その言葉を聞いた瞬間、風の身体がピクリと動いたのが視界の端で見えた。

「……神樹様の力が弱まったって、どういうことだ？」

「1ヶ月前、四国と外の世界を阻む壁が崩壊する事故がおこった」

「事故？つてか、外の世界ってなんだよ」

「ウイルスによって四国以外の世界がなくなったと習っているだろうが、それは間違いだ。ウイルスではなく、バーテックスによって四国以外の世界が破壊されているのだ」

突然の事実にも、俺は言葉を失った。

「バーテックスを防ぐべく、四国より外は壁が作られている。だがその壁が……崩壊した」

「そんな……」

「バーテックス達の進行は勇者……犬吠埼さんらによってどうにか防ぐことはできたが、神樹様はその時の事で力を大幅に失うことになった。バーテックスが出現した際、本来は神樹様が樹海という結界を張る事により現実世界までの影響を最小限にまで防ぐ事ができたのだが、それができなくなった」

そうか、バーテックスが現実世界に現れて足を踏み入れると、いつか学校で現れた時のように腐敗したようになってしまう。それを防ぐのが樹海化つてわけなのか。

「……そして、同時にバーテックスが人型となって現れだしたと」

「ああ。力はこれまでと同じく、個体が小型化のために機動力が高まり、その上に樹海化ができない。バーテックスはこれまで以上の脅威となっている」

「どうやら、俺はとんでもない戦いに足を踏み入ってしまったらしい。」

絶句していると、続けて別のスライドが映し出された。それは、人

間の身体が半分バーテックス化している画像だった。

それを見て、風はやっぱり……と呟いた。

「どした」

「あの子……アタシに猫探しを依頼してきた女の子なの」

「おいまじか!？」

ちよつと待て、と改めてスクリーンに映し出されたバーテックス化した子のスライドを見る。あのバーテックスに見覚えがあった。

その答えはすぐに導き出された。つい先ほど、そして昨日俺が戦ったバーテックスと同じ姿だった。

「あの引き際の良さの意味がわかったよ……」

人間としての知性があるから、逃げるタイミングが良かったんだ。

「そういえば、バーテックス警報が鳴らなかつたけどあれはなんだ
「本当か?……それは調査の必要があるな」

わかり次第、また連絡する。親父はそう言った。

「……ところで、このバーテックス化した人間って救う方法はあるのか?」

「……初めて確認したケースなので何も言えん。ただ、もしこれまでと同じように撃退した場合、恐らく彼女も死亡する可能性がある」

俺たちは、完全に言葉を失ってしまった。

システムをアップデートしておいた、という言葉半分聞き流しながらスマホを受け取り、俺たちは行きと同じように車に乗って帰った。今日一日、あの短時間であまりにも衝撃的なことが続きすぎた。

帰りの車内の空気も悪かった。風も俺も、中々口を開こうとしなかった。と言うより、何を話せばいいのかわからなかった。

結局俺たちは風の家近くに降ろされた。また何かあれば連絡します、と運転手が言うのと車は来た道を走り去って行った。

「……ご飯、食べてく?」

無理に作った風のその笑顔は、あまりにも痛々しかった。

その気遣いを無下にするわけにはいかず、うん、とだけ言った。

風の家に入ると、まだ樹は帰宅していなかった。嫌な予感もよぎっ

だが風のスマホに今帰っている、というメールがあつたらしいので多分大丈夫だろう。

「……ねえ」

「ん？」

「……『風』って、久しぶりに呼んでくれたね」

「……あー」

バーテックスに襲われた時のことを言っているのだろう。

あの時必死だったので、思わず風と呼んでいた。

「……いつからだっけか、呼ばなくなったの」

「……さあ、忘れちゃった」

ソファに座っていた俺の横に、風もドサッと座り込んだ。ふわっと風の香りがした。

「……『燐』」

「ん？」

「辛い？」

「……化け物相手ならいいけど、人間相手だと、な」

「……だよね」

アタシも、どうすればいいのかわかんない。

そう言つて天井を見上げる風。

世界を守るために、みんなを守るためにと戦うと決意したのに。

そのみんなを守るために、みんなの中の1人を殺さないといけないかもしれない。そんな矛盾が、こんなにも息苦しい。

「……」

――諦めちゃダメですよ、燐先輩！

「……」

――勇者部五箇条！『なるべく諦めない』！ですよ！

「……なるべく諦めない」

「え？」

「勇者部五箇条にあんだろ？なるべく諦めないって。まだバーテックス化した子が死ぬかわかんないんだから、こんなところでヘタレちゃダメだろ」

「……ねえ、燐」

「ん？」

「この前も言ってたけど、なんで勇者部五箇条知ってるの？」

あれ。

言われてみればそうだ。

なんでだろ。

「んー……なんかこう、前にもどつかで言った気がするっつーか、誰かが言ってた気がするっつーか……」

「……はは、なにそれ」

「ま、まあいいんだよ！っーか飯食おうぜ飯！腹減ったわ」

「はいはい。食べ盛りの子供がいると大変だわ」

「おめえだけには言われたかねえよ」

そのタイミングで、玄関からただいまーという声が聞こえた。どうやら樹も帰ってきたらしい。

その後、夕食を食べ終え、風が皿を片付けている時だった。

「鏑木先輩」

「ん？」

樹がいつになく真剣な顔で俺に話しかけてきた。

何やら只ならぬものを感じた俺は樹の方に身体を向けた。

「どした？」

えっと、その、と何やら煮え切らない態度だった。ちらちらと風の方を見ており、俺は樹の心情を察した。

「風、そろそろ帰るわ」

「え、もう？」

「明日も学校だしな。樹、下まで送って」

そう言っつて樹を引っ張って、後ろから聞こえる風の声を見無視しながら犬吠埼家を後にした。明日怒られるなこれ。

「あーっと、何の話だっけ」

階段を下りながら、樹に話を振った。

樹は最初困ったように笑っていたが改めて表情を真剣なものに変えて、ようやく口を開いた。

「……今日、大赦に行ってましたよね?」

「……なんで?」

「学校から帰るときに、見えたから……」

大赦の人と、お姉ちゃんと鏑木先輩が車に乗ってるところを。

なるほど、あまり見られたくないところを見られていたらしい。

「……樹、もしかして、お前も勇者なの?」

「……うん。そう、だよ」

なるほど、昨日バーテックスが現れても動けていたのはやはりそういう事だったのか。それに放課後のあの風景を見ただけで大赦に向かっていると分かったということは、樹も何かしら大赦の人間と接する機会があったためだろう。

「……昨日のバーテックス、元は人間なんですよね?」

貫くような視線で、俺を見ながらそう言った。

どうやら聞かれていたらしい。タイミングよく帰ってきたというより、タイミングを計って帰ってきたようだ。

「らしいなあ」

「……鏑木先輩は、バーテックスと戦うの、怖くないですか?」

続けざまに質問をしてくる樹。

「……あー。まあ、怖いよ」

「じゃあ、どうして?」

「うーん……なんか、色々聞いちゃった以上はやらないといけないうつというか、戦う力があるならやらないとなつていうか」

「……」

「でもまあ一番は、みんなで笑つてうどん食べたい、つていうのがあつからさ」

「……うどん、好きだもんね」

「お前もだろ」

そうこうしてるうちに、マンションの入り口まで来ていた。
んじや、また明日。と言って帰宅しようとする前を向いた時だった。

「……？」

前方でゆらゆらと何かが揺らめいていた。

なんだ、と目を細めてそこを凝視する。

「あ、あれ、バーテックス！」

だが先に声を上げたのは、樹だった。

街灯に照らされて、姿を現したのはバーテックス。それも、やはり
というべきか依頼人が変化したバーテックスであった。

「タイミングがいいっつーか、なんっつーか！」

スマホを手に取り、ヘンシンアプリを起動する。

その直後、スマホを手に持った樹が俺の横に立った。

「樹？」

「私も、戦う！」

「お前……」

「もう逃げない！お姉ちゃんと……お兄ちゃんと一緒に、ちゃんと戦
うから！」

その目には、強い意志があった。

彼女にも、何か理由があつて勇者として戦えなかったのだろう。俺
は静かに頷いた。

「2人とも遅いと思つたら、こんな事になつてたのね」

背後から声が聞こえ、振り返るとそこに風が腰に手を当てて立っ
ていた。

風はため息をつきながら、彼女も俺の横に立ってスマホを構えた。

「樹、いいのね？」

「うん。私、もう迷わない」

「……そっか」

「行くぞ！風、樹！」

「「変身！」」

『ヘンシンアプリ起動。モード【ネルヴ】フラワーブロッサム』

ネルヴに変身し、風も樹も同時に勇者に変身した。樹の勇者の姿は黄緑を基調とした服で、フラワーグローリーを連想させるものだった。

変身が完了すると同時に、俺と風は一緒にバーテックスへと駆け出す。樹はやはりグローリーと同じようなロープを出し、バーテックスの動きを封じようと手足へそれを飛ばした。

ロープが足に絡みつき、動きが鈍くなる。その隙にストレートを浴びせ、よろめいた瞬間に風が大剣で斬りつける。それから俺が回し蹴りをして、バーテックスを吹き飛ばした。

そのままバーテックスまで駆け出し、馬乗りになって呼びかけた。「目を覚ませ！あんたは人間だろ！バーテックスなんかになつてどーすんだよ！」

呼びかけてみるも反応はなく、暴れて振り回した腕が当たり、後ろへ倒されてしまった。

だが立ち上がりバーテックスの方を見ると、少し様子がおかしかった。頭を抑えて暴れているのだ。

「ひよつとして、自我がまだあるのか……？」

「でも戻す方法が……」

「……一か八か、やってみるしかねえか」

本当に思いつき、というよりこれしか他にわからなかった。

ケースからフラワーグローリーのチップを出し、スマホに差し込んだ。

『チェンジアプリ起動。モード【ネルヴ】ーフラワーグローリー』

『どうするの？』

「……あいつを倒す」

「あんた、正気なの!?そんなことしたらあの人が……」

「他に方法はねえだろ!……それに……」

もし、このまま人間だからといって放っておけば、被害がもっと広がる。

そうなつてしまえば、何のために俺たち勇者とライダーがいる。

「燐……」

「……」

本当は嫌だった。バーテックスを倒すと同時に、人間を殺してしま
う。

そんな事をしてしまつて、それが勇者と言えるのか。ライダーと言
えるのか。

答えはわからない。それでも。

「世界を守るためなんだ……！」

「燐！」

「お兄ちゃん！」

『ヒツサツアプリア起動。ブレイヴファイニッシュ』

ワイヤーを展開し、バーテックスの全身に絡みつける。

そのままワイヤーごとバーテックスを引っ張り、エネルギーの溜
まった足で、そのままバーテックスを蹴りつけると、バーテックスは
目の前で爆散した。

「燐！」

爆散したバーテックスから御霊が現れた。

「……封印、頼む」

風と樹に封印を頼むと、2人は御霊の封印を始めた。

倒した瞬間に人間に戻れる、なんて淡い期待をしていた自分が甘
かった。

人を殺してしまった、そんな後悔が少しずつ表れてきて、心臓の鼓
動が早くなつていった。

だがその時だった。

「えっ？」

御霊を封印した瞬間、三角錐から黒い影がコンクリートの道路に落
ちていった。

まさかと思つて顔を上げると、そこには制服を着た女の子が倒れて
いた。

「な、なあ風。この子……」

「……よ、良かった……」

風が口に手を当て、目に涙を溜めていた。彼女のリアクションを見るに、バーテックス化した女の子の間違いないのだろう。

樹は風の腰に抱きつき、喜びを分かち合っていた。

「……」

俺も素直に喜びたい。なのに。どうして喜べないんだろう。

……ああ、そうか。

——世界を守るためなんだ……！

世界を守るためなら、平気で人を殺そうとする。そんな自分にドス黒い感情を抱いていた。

◇

同時刻。

羽波病院の病室。

「……樹ちゃんも、勇者部に戻ったそうね」

「らしいわよ」

「……私は、先輩にどんな顔で会えばいいのかわからない」

「それは私だって同じよ。……でも、アイツは風が支え続けてきて、ようやく立ち上がった。樹も悩んでいたけど、彼女なりの答えを出すことができた」

「次は、私たちの番、ね」

「……東郷、あんたに整理の時間が必要なのはわかってる。だけど、その時間が残り少ないのも事実なの」

「……」

「私は……行くわ、勇者部に」

「夏凜ちゃん……」

「……覚悟を決めなさい、東郷」

「……」

「ねえ、私は、どうすればいいの」

「どうすればいいのかな……」

「……………答えてよ……………友奈ちゃん……………」